
クロッシング

みつほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロツシング

【Nコード】

N8090A

【作者名】

みつほ

【あらすじ】

最初の出会いは、次の出会いを呼ぶ春の桜が舞い降りるなか、とある大学では噂の女がいた。プレイガール…これが、その女の影で呼ばれ方…でも

プロローグ

春夏秋冬と言う季節が過ぎて、また、春が来る

まだ、寒さが残る2月の頃、一つの男女が、暗い会話をしている。

「別れたいんだ」

そう、別れを切り出したのは、男の方

「お前がよく分かんねえんだ。俺は、お前と釣り合う事ができない気がする」

弱音を吐くように、男は語る。だが、女の方は、表情一つ変えること無く、小さく頷いて見せた。

男も、それ以上、言うこともない。いや、言えなくなると

そのまま、背を向けて、じゃあなっと言葉を残し、歩き出す。

どこことなく、振り向くのをこらえている様な、未練を残した表情で、歩いて、その女の元から姿を消す。

まだ幼さを少し残す、その女は：まだ、10代くらいだろうか、彼女の顔には、悔しさ・悲しさ・寂しさなど、まったく残っていないかった。

ただ、平然として、『別れて当然』と、言ったような無表情さがあった。

だが、彼女は、小さな声でポツリと、言葉をもらした。

「何でだろう…」

そう 一言

季節は巡る 春は来る

出合いが待つ 春が来る

第一話 季節は…（前書き）

一人称ではなく、恋愛ものは書けるのか？と、思ったので、書いてみるつもりです。恋愛ものは苦手なので、のんびりと投稿すると思います。宜しくお願いします。

第一話 季節は…

桜が風により舞い降りる姿は、少し気持ちをホッと和ませる気がする。

そんな風に思ったことは無いだろうか…

「あれって、水瀬 幸恵じゃないか？」

そう、話を振られた人は、かしまみのる鹿嶋豊、髪を薄い茶色に染めた健康そうな感じがする青年。

今年の春、晴れて大学生になった学生である。

その、豊に話しかけてきたのは、大学に入って最初に仲良くなった二人の間。

「みなせ、ゆきえ…で、何で、名前知ってるんだよ。もう、大学先輩キープってか？」

そう豊が、友達の一人に振るが、友人達は、顔を見合すと、一人は呆れた顔、もう一人は笑いながら突っ込んだ。

「あはは、お前最高！真顔で『大学先輩キープってか？』だって、腹ねじれそう…」

「そこまで、笑うかよ」

豊は、カッコイイ台詞が似合わない、それは雰囲気にある。

彼は、女友達とかに、可愛いと見られやすい、身長は170は、いつているがキザな台詞なんか言った日には、女達の格好のおもちやだ。

「わりいわりい、だってお前、そんな台詞が似合う奴に見えなくてさ」

「それに、大学入ってそうそう、先輩の名前、覚えられる訳が、無いだろう？まったく講義の時間が違うしな？」

「じゃあ、なんであいつを…？」

「んなのあたりまえじゃん、同じ一年で“プレイガール”だって、噂だぜ？」

そんな、根も葉もない噂が、何処から来たのかは、知らないが、豊の友人達はノリノリだった。

こんど誘うか？など、話しているが、豊本人は、そんな事には、どうしてもついていけなかった。

だが、本当に有名らしく彼女の名前を他の友人に振ると「興味でたのか？」「辞めとけ」など、言われてしまう。

彼が、分かった事は関わってはいけないって事だけだった。

春が温かみをましてきた日、大学の図書館で豊はボーっとしていた。

「あ、れ？あれ？ええ！？」

腕にある時計を見て叫ぶ、

（なんて事だ…寝てしまっていた。しかも、友達は俺を置き去り、置手紙だけ残して遊びに行っているし）

時間は、午後6時をさすころだった。広げていたノートと本をしまい。図書館を後にする。

「はあ…あ、バイトも探さないとなあ」

何気なく思った事を口にする。図書館の外で大きな背伸びをして歩きます。すると、開いていたバックの中からファイリングしていなかったノート（ルーズリーフ）が落ちた。

「あ！」

慌てて、拾って鞆に仕舞う。

そして、前を見たとき、誰かが門をくぐって、歩いてくるのが見えた。

（誰だ？）

女の人に見える、幼さが残っているところからして、多分、同じ一年だと豊は感じた。

だが、もう6時、ほとんどの学生は帰ってしまつて、とても静か、彼の横を通つていく彼女の、肩まで長い黒い髪がなびいて見えた。

（綺麗な髪…顔立ちも、好みかも）

そう思いながら、その場を後にしようとした時

「待つて、その君」

そう、澄んだ掠れた声が聞こえた。

止まって振り向くとあの女性が立っている。

「な、何？」

つい、ドキッとしてしまった。

「これ。もしかして…君の？」

そう言うて見せてきたのは、講義のプリントだった。全部拾ったつもりが、まだ落ちていたのだ。

「あ、本当だ。ありがとう」

慌てて近寄って手にする。が、彼女は「じゃあ」と言ってその場を離れようとする。

「ちょ、待つてよ！君は何年？俺、一年の鹿嶋！」
そう叫んでいた。

「…だから？」

素っ気無い、普通は、名乗るものじゃないだろうか

「だから、な・ま・え！！」

「誰の？」

「君の」

そこまで言つとああ、と言った顔をして

「幸恵」

「……え」

「水瀬 幸恵…ばいばい」

それだけ名乗ると、講義をする部屋へと足をのばす。

豊は、シヨックだった。タイプだと思った女が、なんとあの、大学で有名な女だったわけだ。

「マジかよ…」

ちよつとどころのシヨックでは、なさそうだ。

太陽が、沈む夕方の講義室・・・

そこに、黒髪が光に反射するほど綺麗で、肌が白く、少し幼さを残した女性…いや、少女がある、デスクで立っていた。

「あつた…」

手にしたのは、可愛いキーホルダーだった。それを手にして大学を後にした。

（さっきの人、もう帰ったよね）

辺りを見渡して、ちょっと残念そうに思った。

第一話 季節は…（後書き）

どんな話にしになっていくかは、まだ秘密です。
ベタな終わり方になりそうで、少しドキドキです。
主人公は、多分、幸恵だと思います。

第二話 次の日

無口に見えて話しかけずらい印象を見せる彼女、水瀬幸恵は、話せば普通に会話ができる。

その為、影で何を言われていようと関係なく、普通に友達の1人や2人は、出来ていたりする。

今は、皆で食堂で昼食の真っ最中。だけどそんな、楽しい筈の食事の中で

「水瀬ってさ、“男遊び”をよくするって噂、本当なの？」

なんて、ふざけて聞いてくる学生もいる。

それに対しても、天然なのか「さあ？」と、答えて昼食をまた再開する幸恵に誰もが言葉が詰まる。

「あ……」

幸恵が、思い出したかのように口を開いた。

「今何時だろ？」

そう言いながら、携帯の時計に目をやると、慌てて立ち上がって荷物を手に持つ。

友達は、不思議そうに聞いてきた。

「何？次の講義とか？」

「うっん」

「じゃあ……誰かに会いに？好きな人？」

「うん」

ふざけて聞いたつもりが、すんなりと返事をされて、皆驚いて固まる。だが、すぐに幸恵に食って掛かる。

「誰？誰なの？」

「いつから付き合ってるのよ！てか、あの噂、マジもん？！」

食堂で、騒ぎだす。それでも、幸恵だけが、不思議そうな目で友達を見る。

「付き合ってるって言うより……昔からの『大切な人』？」

わざとなのか、それとも素なのか、友人達は、うざったそうに幸恵に目を向ける。

「じゃあ」

それだけ、口にすると、幸恵は、その場から立ち去ってしまった。

「な、何あれ：マジでボケてるわけ？」

「じゃないの？そうじゃなかったら、私、絞め殺してそう」

幸恵がいなくなった、そのテーブルでは、まだ話は、終わらない。更なる、話題が広がってしまっているから。

* * *

「おい、鹿嶋」

「……………え？」

「講義、終わってんぞ？」

そう言われて豊は、辺りを見渡した。

講義室には、学生がほとんどいない、豊に声をかけたのは、仲良くなった2人の友人の一人、富永とみながとし肇だった。

「あれ、いつのまに」

「10分前くらいから、教室出た時、お前の姿がないから態々戻ってきてやったんだ。感謝しろ」

富永は、あたかも普通のように、えばってみせる。

「はいはい、ありがとさん」

そう言いながら、豊は立ち上がり、鞆を持つと講義室から出る。その後ろを、富永がのんびりと追う。

「鹿嶋、講義始まってから、この時間まで、ノート取らずに、ずっと上の空なんて珍しいな？」

「別に、今日は、やる気無かったただけだし」

「あ、そ、単位落とすなよ」

「え、ちよつ！ノート写させるよ！てか、今日の講義のやった範囲だけでも教えるよ」

そんな感じに、青春（？）を満喫している豊なのだが、この前のが忘れられないでいた。

幸恵との出会い、まさか、好みだと思った相手が、あの陰口叩かれていた女だと、思っても見なかったからだ。なんだか、どう自分の頭の中で整理していいか、良く分からなくなっている。そんなこんなで、講義の内容なんて、頭に入らない。

まるで、色ボケしているかのよう。溜め息だけが漏れる。

* * *

賑やかな午後少し過ぎの駅の側の通り

「ええ~~~~~!!」

その駅の側にある、オープンカフェの喫茶店で、高い声の叫びが響く。通りを歩くものは、その声を追って、目線をチラチラ送る。

声を上げた女性は、少し頬を染めて、声のトーンを下げて、誰かに話しかけた。

「ちよつと、私が女だって言っていないでしょうね？」

「言っていないけど？どうして？」

その女性が話していたのは、水瀬幸恵だった。

幸恵の大切な人とは、この女性の事なのだろう。名を、まつもと ゆき松本由貴と言う。

身長は、幸恵と同じくらい。

幸恵が、162cmくらいで、その身長と変わらない。

ポニーテールをした。面倒見のよさそうな、女性だ。実を言うと、

幸恵とは、中学の時から付き合っていたりする。

彼女は、少し安堵すると、幸恵に言った。

「良かった、変な誤解されたら、どうしようかと思ったじゃん」
「ふん…」

「あのね、大学の友達に誤解されるような事、止めてよ？」

「そう？だって『大切な人』って、一番の友達の事を言うんでしょ？」

「違うわよ！ある意味、違わないけど、一般的には、勘違いされるの！」

「そうなんだ…じゃあ、次の講義で会うときにちゃんと、説明しておく」

ウェイターが持ってきたショートケーキをパクパク食べながら、幸恵は、由貴に言った。

「もう、あんたが心配でしょうがないよ。大学違うしさあ、何かあったらメール、忘れないでよ？」

溜め息をつくように、由貴は、そう言い放った。

それに対して、ケーキを口に運びながら、コクコクと小さくうなずく。

幸恵は、心のどこかで由貴はやっぱり、一番の友達と思った。

第二話 次の日（後書き）

結構、恋愛モノって難しいですね。ちょっとビックリです。
なので、下手な突っ込みは、ご勘弁下さい（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8090a/>

クロッシング

2011年1月4日14時24分発行